

尾崎紅葉文学における中国的要素試論 ——小説『巴波川』の解説を中心に——

張 秀 強

一

尾崎紅葉の文学における中国的要素という課題について、管見の限り、先行研究ではあまり取り上げられていないのが現状である。尾崎紅葉の研究に携わってきた平岡敏夫、十川信介、岡保生、土佐亨、木谷喜美枝、菅聡子、関肇、馬場美佳、酒井美紀などの研究成果にも、尾崎紅葉の文学と中国古典との関連を論じるものは数少ない。先行研究の中では、土佐亨が「紅葉細見 雑考四篇」⁽¹⁾において、雑考四篇の一考として尾崎紅葉の翻案小説『偽金』とその原話となる『嫁禍自害』を考察し、第一次資料として中国語原文を全文掲載している。また、尾形国治は「紅葉と陸游」において、『金色夜叉』に登場する陸游の詩作『楼上醉歌』に着目し、陸游自選の全集『渭南文集』および『劍南詩稿』を尾崎紅葉が渉獵した可能性を推定し、『金色夜叉』の主題と構想の原拠を、尾崎紅葉の愛読した『唐宋詩醇』中の詩人陸游との関係においてとらえることも可能であると示唆した⁽²⁾。この論文二篇以外には尾崎紅葉文学と中国文学との関連について論じる日本人の学者は現在のところ見つかっていない。

ところが、尾崎紅葉の日記や書簡をじっくり読むと、中国の書物に関する読書記録がしばしば出てくるし、またその作品には、中国人名や漢詩、漢籍などがよく登場する。これらの中国的要素を洗い出し、整理することは、尾崎紅葉文学における中国古典の研究に一助あり、ひいては中国古典の明治文学にとっての意味の研究に役立つのではないだろうか。そこで、筆者はまず基礎的文献の調査対象として尾崎紅葉の日記を選定し、そこに記録された中国人名、作品名を収集してみた。

尾崎紅葉の日記には、まず『十千万堂日録』がある。これには、明治三十四年(1901年)元旦から10月10日までの約十ヶ月の日記の記録がある。そして、若干時期が『十千万堂日録』と重なるが、日記内容にはやや相違点のあるものとして、1901年(明治34年)7月から1903年1月までの日記がある。また、その他1899年6月の塩原紀行と7~8月の赤倉・新潟・佐渡日記も調査の対象とした。調査の結果の一覧表にまとめると、以下の通りである。なお判読の便宜のため、該当人名や書名は太字で強調し、下線を表示した。

付表：尾崎紅葉日記に見られる中国関連書物など

日付	日記内容
1901年2月1日	李鴻章 病死の報有り。
1901年2月4日	蓆中に在りて、 文心雕龍 を読む。
1901年4月28日	枕上、 夜譚隨録 を読む、四巻。到天明。
1901年4月29日	夜に入りて、 夜譚隨録 を読む、徹宵。
1901年4月30日	快晴。正午起、 夜譚隨録 を読む。
1901年5月1日	枕上、 夜譚隨録 完了。
1901年5月10日	十時過ぎより 咫聞録 を繙く。
1901年5月11日	雨繁く気甚だ寒し終日 咫聞録 を読む。
1901年5月24日	九時半起。食後、十一時、車にて本郷岡野に寄り、乙羽子附添人の見舞いとして煎餅類一折、(中略)を求め、途次文求堂にて 霞客遊記 十巻(価八円也)
1901年7月9日	雨。午後別宅にて 咫聞録 中の一節を口演体に草せる際、金港堂編纂員倉林某来訪。
1901年7月10日	曇。九時頃、池田愛子、使を遣して、藤村の蒸菓子一折を届け越せり。之を携へて学海翁を訪ひ、 咫聞録 中の字句の質疑を為し、十一時辞し帰る。
1901年7月11日	雨。 紅樓夢 四帙二十四巻(三円半)文求堂より持参。
1901年7月20日	午後浅草中村蘭台を訪ひ、篆刻注文。帰路烏黒翁を訪ひ、明人趙浙所摸の 清明上河図 一巻を見る。精描詳悉可驚也。価二百円とぞ。山内容堂公の某に賜ふ所の物と云ふ。
1901年9月3日	此月始めより 紅樓夢 を披読す。
1901年9月16日	夜 嫁禍自害 の口演を草す。
1901年9月19日	赤城祭礼にて鼓笛の声、夜に入る迄聒し。口演 偽金 を草す。
1901年9月20日	驟雨数々到る。午前苔花生来る。 偽金 を草す。
1901年9月30日	此夜鏡花深夜迄談ず月明可賞。立待月也。月明楼上 淮南子人間訓 を読む。
1901年11月8日	李鴻章 鳩を服して卒去の報新聞に出づ。七十九才。可惜午前竹冷氏に句稿を送る。 木蘭奇女伝 (廿五銭)を求め大学病院に乙羽子の病を訪ふ。
1903年3月25日	帰途琳琅閣にて 寄所寄 、 紀曉嵐五種 、 書啓合璧 の三種を買ふ(四円八十銭)

(『紅葉全集』第十一巻(東京：岩波書店、1995)に収録された尾崎紅葉の日記を参考にして筆者が作成。黒文字は筆者によるもの)

以上、現在『紅葉全集』に収録された尾崎紅葉の日記記録を手がかりに、尾崎紅葉の中国関連の読書記録や、中国関連の書籍購入及び中国関連の尾崎紅葉の評論を収集してみた。例えば、1901年2月4日の「蓆中に在りて、文心雕龍を読む」という読書記録を分析すると、尾崎紅葉が『文心

『雕龍』を読んでいる時は、「蓐中」とあり、つまり病気をして床に横になっていることが読み取れる。この事実はつまり、尾崎紅葉が初めて『文心雕龍』を読んでいるというのではなく、むしろ、『文心雕龍』をいつも枕元において、日常的によく繙いていたのだと理解してよからう。それから、尾崎紅葉の『紅樓夢』購入の書店である文求堂を調べると、中国書籍を専門に販売していた書店であり、書店の主人であった田中慶太郎(1880 - 1951)は郭沫若とも親交があった。これに加えて、『清明上河図』を見たあとの感想に、「精描詳悉可驚也」という漢文記述などから見て、尾崎紅葉が中国のことに相当の興味を持っていたことが窺われよう。

さらに、尾崎紅葉の読書記録を整理すると、尾崎紅葉は特に明治34年(1901年)に、中国関連の書物『文心雕龍』、『夜譚隨録』、『咫聞録』、『霞客遊記』、『紅樓夢』、『淮南子』、『木蘭奇女伝』などを読んだことが分かる。漢学者石川鴻斎に師事したこともあり、漢文の素養が高い尾崎紅葉とはいえ、かなりの読書量と言わなければならない。しかも、これは1901年一年間だけの中国関連読書で、尾崎紅葉の日記では、ツルゲーネフ、ゲーテ、ダヌンチオ、メーテルリンクなど西洋の書物もたくさん渉獵している。尾崎紅葉の日記は現存のものとして1901年からのもので、それ以前の中国関係読書記録には、「書目十種」に挙げられた『唐宋詩醇』がある。しかし、1901年の読書記録から推察するには、尾崎紅葉の中国関連書物の読書範囲はもっと広範囲にわたるものだと思う。その証拠として、尾崎紅葉の文学作品に漢詩文や中国関連書物の名前が頻出していることが挙げられる。さらに、特筆しなければならないのは、1903年3月25日の『寄所寄』、『紀暁嵐五種』、『書啓合璧』の書籍購入記録であろう。尾崎紅葉がこの世を去ったのは1903年10月30日のことで、その死ぬ半年前の中国関連書籍の購入となる。尾崎紅葉が病中にもかかわらず、貪欲に中国の書物から文学の素養を吸収しようとしていたことが分かる。

なお、これらの中国関連書物が具体的に尾崎紅葉の作品にどのように反映され、どのように素材として生かされたかについては、さらなる実証的研究が必要であるが、いくつか現時点で筆者が把握していることを挙げると、例えば『金色夜叉』には荒尾讓介が街頭で狂吟する詩作があり、その詩作は実は陸遊の書いた詩である。これは尾崎紅葉の『唐宋詩醇』についての読書経験と照合できる。また、尾崎紅葉の『紅樓夢』披読に関して、尾崎紅葉と忘年の交わりのある漢学者依田学海(1833—1909)の推薦による可能性が高い。というのは、1902年春陽堂出版の『金色夜叉続篇』に依田学海「与紅葉山人書」が載っており、この漢文で書かれた手紙の中に『紅樓夢』が登場しているからである。以下に全文を引用する。

紅葉山人足下。僕幼嗜讀稗史小説。當時行於世者。京伝三馬一九。及曲亭柳亭春水数輩。雖有文辞之巧麗。構思之妙絶。多是舐古人之糟粕。拾兔園之殘簡。聊以加己意焉耳。独曲亭柳亭二子較之余子。学問該博。熟慣典故。所謂換骨奪胎。頗有可觀者。如八犬弓張俠客伝。及田舎源氏諸国物語類是也。然在当时。讀此等書者。不過閭巷少年。畧識文字。間有涉獵史伝者。識見淺薄。不足以判其巧拙良否焉。而文学之士斥為鄙猥。為害風俗。禁子弟不得縱

読。其風習可以見矣。」年二十一二。稍讀水滸西遊金瓶三国紅樓諸書。兼及我源語竹取宇津保俊蔭等書。乃知稗史小説。亦文学之一途。不必止游戲也。而所最喜。在水滸金瓶紅樓。及源語。能尽人情之隱微。世態之曲折。用筆周到。渾思巧緻。而源氏之能描性情。文雅而思深。金瓶之能写人品。筆密而心細。蓋千古無比也。近時小説大行。少好文辞者。莫不爭先攘臂其間。然率不過陋巷之談。鄙夫之事。至大手筆如金瓶源氏等者。寥乎無聞何也。僕及讀足下所著諸書。所謂細心邃思者。知不使古人專美於上矣。多情多恨金色夜叉類。殆与金瓶源語相似。僕反覆熟讀不能置也。惜範圍狹。而事跡微。地位卑而思想偏。未足以展布足下之大才矣。盍借一大幻境。以運思馳筆。必有大可觀者。僕老矣。若得足下之一大著述。快讀之。是一生之願也。足下以何如。⁽³⁾ (下線引用者)

とりわけ「盍借一大幻境。以運思馳筆。必有大可觀者。」というあたりは、紅樓夢の「太虚幻境」を想起させるところであるし、『金色夜叉』の連載が遅滞気味になっている尾崎紅葉へ、紅樓夢を讀んでみたらどうかと依田学海は親切なアドバイスを出したのである。そうであるとすれば、尾崎紅葉は素直に依田学海の意見を受け入れたことになる。前田愛の論文「明治初期文人の中国小説趣味」では、依田学海を中国小説通とし、「学海の蔵書には『宣和遺事』・『説岳全伝』・『今古奇観』等の白話小説、『情史類略』・『虞初新志』・『西青散記』・『閱微草堂筆記』『聊齋志異』等の伝奇小説、『品花宝鑑』・『春江花史』・『春江燈市録』等艶史類を含んでいるが、もっとも愛読したのは『水滸伝』・『金瓶梅』・『紅樓夢』の三書である。」⁽⁴⁾と記してあるが、これらの蔵書のうち、『閱微草堂筆記』、『聊齋志異』、『水滸伝』、『金瓶梅』、『紅樓夢』などは尾崎紅葉の読書範囲にも入っている。尾崎紅葉と依田学海の忘年の親交を考え合わせれば、尾崎紅葉のこうした中国小説趣味は漢文学の先輩依田学海から受けた影響である可能性もあろう。

以上のように、尾崎紅葉の日記における中国文学の記述を分析してみたが、調査を通して、尾崎紅葉が中国文学を数多く涉獵していることが分かった。そうすると、これらの中国文学がどのような形で尾崎紅葉の文学作品に反映されているかが次の問題となろう。以下具体的なケーススタディとして、尾崎紅葉の小説『巴波川』における中国的要素について検討してみたい。

二

『巴波川』は1890年12月25日、「新著百種」の号外として、吉岡書籍店から刊行された尾崎紅葉の初期作品である。この作品は作者尾崎紅葉の友人である青木某が暑中休暇の筑波登山の帰路に投宿した栃木町で体験した秘密のこととして語られている。青木は安宿の娘お蔭の美しさに驚き、腹痛から逗留6日に及ぶうちに、青木とお蔭は心通わせ、明日は帰京という夜、お蔭を部屋に誘い灯火を吹き消し「有無をいはず契りぬ」。翌朝、青木の懐にはお蔭の書き置きが残されていた。「わたくし事は浅ましき病の片輪ものゆゑ、一度男に肌ふれ候へば一時に病發りて、見さへいまはしき

容に相成候因果のうまれ」と書かれている。全体的に伝奇性に富んだ作品と言える。また、作品の題名となった巴波川は、実際にある日本の栃木市内の中心部を流れる川で、明治初期までは江戸とを結ぶ水上交通の要で、鉄道ができるまでは米や特産の麻等を数日かけて舟で運ぶ川となっていた。

この『巴波川』の同時代評価は必ずしも高いものではなく、例えば、風俗道徳を破壊するものとして、撫象子は『女学雑誌』で「小説と云ふものにして若し斯の如く成りもて行かば、良家の父兄は一切其子女に小説を手にするを得さしめざるを善けれ。」⁽⁵⁾と批判している。一方、『日本評論』に松琴居士が長文の評論を書き、「当今文壇の一勇将として人も許すなる紅葉山人が、如何にしてかかるツマラヌ小品文のものせらるるか、吾人殆んど山人の意を解する能はず」⁽⁶⁾と尾崎紅葉の作意を槍玉に挙げている。石橋忍月も『国会』の文苑というコラムで、新年前後の諸作を評し、新著百種号外の『巴波川』と『新桃花扇』を取り上げて、「紅葉山人筆愈々熟して」と肯定する一方で、「想愈々環る惜むべき哉」と小説『巴波川』の着想を批判し、さらに「紅葉の作には常に女子の情を弄んで男子の寸快寸歎の犠牲に依するの意あり」⁽⁷⁾と尾崎紅葉の三省を促している。

如上の尾崎紅葉と同時代の論評に一徹した尾崎紅葉の創作文意図批判に対して、平岡敏夫は、「紅葉の初期小説——「おぼろ舟」その他——」（『国語と国文学』1968年4月）、「巴波川のほとり——紅葉・女物語一断章——」（『国語通信』1975年10月）などの論文では、「むき玉子」や「おぼろ舟」などの尾崎紅葉の初期作品を取り上げ、『巴波川』との関連性も含めて、尾崎紅葉の小説創作を類型化し、つまり「若き婦人を無惨の末路に落す」⁽⁸⁾物語として扱っている。

このように全体として、発表当時から尾崎紅葉の『巴波川』は、必ずしも高い評価を得ていないが、話題の珍奇性により、短篇作品であるにも関わらず、数多い尾崎紅葉の作品の中では比較的多く注目を受けている作品であると言える。

(1) 『巴波川』の伝奇小説的性格について

ところが、『巴波川』に纏わる論評は必ずしも批判だけではない。近年、研究視野の広がりとともに、もっと多角度からの読みが可能になった。例えば、秦重雄は『挑発ある文学史——誤読され続ける部落／ハンセン病文芸』（かもがわ出版、2011年10月）でも、この『巴波川』が少し取り上げられ、秦重雄も最初は「一読後、紅葉が小遣い銭稼ぎに一筆書きで書き飛ばしたショートストーリーとしてしか思えなかった。しかし、紅葉を熟知している人にとってはもう少し重い位置づけが可能であったようだ」⁽⁹⁾と書いている。

秦重雄が少し重い位置づけが可能と判断したのは、尾崎紅葉の弟子徳田秋声の以下の言葉を根拠にしている。「元来先生はスケッチライターで、西鶴やモオパッサンがすきであつたとほりに、意気な小品を作ることが先生の生命であった。」（徳田秋声「紅葉先生との接触面」、『女性』大正一四年四月、八木書店版全集第20巻333頁）

そして、徳田秋声の言う「意気な小品」に『巴波川』は当たるだろうとして、秦重雄は次のよう

に『巴波川』を総括している。「『命捨てて御情けにあづかり申候』お蔭は自己の愛を貫くと同時に残された『頼みなき母』のことを青木に切々と託すのである。深読みすれば、恋愛と孝行とを死を以て両立した女性を紅葉は描いたと言えよう。」⁽¹⁰⁾

ここで、「恋愛と孝行とを死を以て両立した女性」と作品を捉える秦重雄の論点の意義は『巴波川』をハンセン病文芸として取り扱っていることにある。確かにこの女性主人公の身分設定は作品にとって重要な意味を持つ。しかし、全体的に伝奇性に富んだこの作品には、中国の唐代伝奇小説『遊仙窟』あるいは蒲松齡の『聊齋志異』を連想させる雰囲気はどこかにあるように思える。小説の本文にも、以下のような場面がある。

（女人は）行燈を適所に直し、しとやかに跪きて燈心を搔立つる時、始めて其顔を見れば！
 やや、此所は魔窟か、此奴変怪か、凄いほどの美色。火影を眩ゆがりて織むる眼波に、えも言はれぬ情思の籠れるに、女色には鈍き青木もしみじみ感じて、心魂脱けたごとく惘とその顔に瞳を凝らせば、女人は振向き様に合はすその顔を微紅めて俯きながら、只今お煙草のお火をと、小聲に言捨てて逐はるるやうに下りけり。

青木は手を組みて顰むる眉の下よりきつと壁を睨み、此女の正体何と判断に苦しむは、安宿に過ぎたる女人、過ぎも過ぎたる美色、栃木町にも……県にも過ぎたる美色、いやいや下野、下野はおろかな事、都にとともあるまじき花艶、下女か女子か、淫売か、其にしても此にしても過ぎたる容色。我心には措かじと誓ひし迷信発りて、一笑に付したる聊齋志異剪燈新話などの怪談を憶ひ合わせ、理外の理のなきにも限らざる妖怪などにてあらむも知れずと、虚心に復れば我ながら愚痴なる分別の出づるも、意外の顕象に惑へる心の曇なり。⁽¹¹⁾
 （下線引用者）

上の記述でわかるように、「魔窟」の箇所はそのまま『遊仙窟』の旅の途中で深山に迷い込んだ神仙窟を連想させ、その延長線で敷衍するならば、青木=張生、お蔭=崔十娘といった構図になる。尾崎紅葉の集大成作である『金色夜叉』には、「佐分利と甘糟は夙て横濱を主張して居るのだ、何でも此間遊仙窟を見出して来るのだ。」⁽¹²⁾ という一文があり、遊仙窟の一語は高利貸となった貫一の隠姓埋名の生活ぶりの比喩となっている。尾崎紅葉が『遊仙窟』という作品を熟知しているからこそこのような援引が出来たのであろう。

また、引用段落の中には、『聊齋志異』、『剪燈新話』も出ているが、橋口晋作の『巴波川』注釈本によれば、藤田祐賢に「紅葉が志異の『花姑子』（巻八）をたねにし、癩病にからまる巷説のあやしさを趣向として取りあげて、この『巴波川』を作ったのではないか」という見解がある⁽¹³⁾、これも『巴波川』という作品の中国的要素の一つの表れになろう。藤田祐賢の論文は中国語の翻訳バージョンしか入手できていないが、藤田はこの論文において『聊齋志異』が『巴波川』の作中に出ていること及び『巴波川』の冒頭部分が『花姑子』と類似していることを挙げ、作品についての

詳細な論証はしなかった。なお、藤田は『巴波川』が『聊齋志異』の『花姑子』から影響を受けたことについて強調し、尾崎紅葉が漢学の先生である石川鴻斎を通して『聊齋志異』を知るようになった可能性が高いとも論じている⁽¹⁴⁾。筆者は試みに『聊齋志異』の『花姑子』という作品を調査し、『巴波川』と比較してみたところ、少なくとも両作品には以下のように類似箇所が存在することが分かった。

付表：『花姑子』と『巴波川』両作品に類似箇所。

『聊齋志異』の『花姑子』 ⁽¹⁵⁾	巴波川
暮帰、路經華岳、迷山谷中、心大恐。一矢之外、忽見灯火、趨投之。	大構の店を余所にして某町の小路に、煤け行燈の見る影もなき安泊に飛び入れば、
俄女郎以饌具入、立叟側、秋波斜盼。安視之、芳容韶齒、殆類天仙。	青木は手を組みて顰むる眉の下よりきつと壁を睨み、此女の正体何と判断に苦しむは、安宿に過ぎたる女人、過ぎも過ぎたる美色、栃木町にも……県にも過ぎたる美色、いやいや下野、下野はおろかな事、都にとともあるまじき花艶、下女か女子か、淫売か、其にしても此にしても過ぎたる容色。
房西隅有煤炉、女郎入房撥火	家が古うござりますゆゑと行燈を適所に直し、しとやかに跪きて燈心を搔立つる時、始めて其顔を見れば！
忽聞女郎驚号。叟奔入、則酒沸火騰。	颯と涼しく吹来る風に、ふすふすと音して柴の焚上るに驚き、鳶よ鳶よと喚起てながら小股走りに行きけり。
睹仙容、使我魂失。	火影を眩がりて織むる眼波に、えも言はれぬ情思の籠れるに、女色には鈍き青木もしみじみ感じて、心魂脱けたるごとく惘とその顔に瞳を凝せば、
生漸入室、女起、厉色曰：入闥将何為将何為。生長跪哀之。女奪門欲去、安暴起要遮、狎接膝月亟。	青木満心の勇を鼓して矢庭に燈火を吹滅し、有無をいはず契りぬ。

(本表は筆者によって作成)

以上から分かるように、『花姑子』の場合は、書生安幼輿が深山で道に迷い、近くの村落の宿に入り、宿主人の娘である花姑子に恋し契ったが、花姑子の正体は香簾の妖精であるが故に二人は結婚できず、花姑子は安幼輿との間に出来た子を生み、人に頼んで安幼輿に届ける話となっている。後半の話の展開には違いこそあれ、前半には場面の類似が確かに多くあったと言えよう。以下にこれらの類似点を少し整理してみる。

まずは男女主人公の出会いの場面設定を見てみよう。『巴波川』において、青木は「筑波へ登山して麓を早発に、栃木へ廻れば其日は暮けり。旅店を求めけるに囊中乏しければ、大構の店を余所

にして、某町の小路に、煤け行燈の見る影もなき安泊に飛入り、そこで美女のお蔦と出会うことになるが、『花姑子』でも、安幼輿は「暮帰、迷山谷中」、「一矢之外、忽見灯火、趨投之」となっている。その安宿で「芳容韶齒、殆類天仙」の花姑子と出会っている。しかも、青木が初めてお蔦の顔を確認した場面は、お蔦が「行燈を適所に直し、しとやかに跪きて燈心を搔立つる」時であって、安幼輿も花姑子の美貌を意識し始めた場面は、「房西隅有煤炉、女郎入房拔火」、つまり、部屋に入って火を搔き立てた時である。細部の小道具は違うが、場面設定としては類似しているといえよう。

また、『巴波川』では、洗足の水を沸かす「四十格好の女房」が「颯と涼しく吹来る風に、ふすふすと音して柴の焚上るに驚き、蔦よ蔦よと喚起てながら小股走りに行きけり」という場面があり、『花姑子』でも「忽聞女郎驚号。叟奔入、則洒沸火騰。」という場面がある。一方では母方が水を沸かす時に燃える火が原因で慌て、一方では酒を温める花姑子が燃える火が原因で狼狽する。こうした場面の類似はけっして偶然の一致とは言い難いであろう。

このほかに、青木の腹痛を看病するお蔦の形象は病中の安幼輿を見舞いする花姑子の形象と重なり、明日は帰京という夜、満心の勇を鼓してお蔦を部屋に誘い灯火を吹き消し「有無をいはず契りぬ」と悩んだ挙句に性欲の衝動に走った青木の形象は、「生漸入室」（漸く部屋に入った）、花姑子に「狂郎入闖將何為」（私の寝室に入って何をやる気か）と抗議されても、まだ執拗に花姑子に「狎接」の強要をする安幼輿の形象とも重なる。さらに、「やや、此所は魔窟か、此奴変怪か、凄いほどの美色。」とお蔦の美貌を目にした青木はお蔦を「魔窟」にいる「変怪」=妖精ではないかと疑うようになり、その後の心理描写でも「我心には措かじと誓ひし迷信発りて、一笑に付したる聊齋志異剪燈新話などの怪談を憶ひ合わせ、理外の理のなきにも限らざる妖怪などにてあらむも知れず」とあり、つまり、今まで青木は妖怪、変怪の存在を迷信だと考え、『聊齋志異』、『剪燈新話』などの話も一笑に付して信じなかったが、お蔦を見るに至って妖怪の存在を信じはじめたことになる。この場面ではとりわけ「妖怪」を取り上げたことと、『聊齋志異』の書名が『巴波川』の作中に出てきたことが決定的な要素だと言えよう。

もっとも、上述した類似点以外にも、両作品の全体の雰囲気の種類が考えられるが、ここでは詳細な考証は省く。『花姑子』と『巴波川』の最大な相違点は、『花姑子』は「恩返し」が主題になっていることであろう。主人公の花姑子が安幼輿に肌身を許したのは、かつて安幼輿が自分の家族を助けたことが大きな理由になっている。『巴波川』では、青木とお蔦の間には、そうした「恩」や「義理」が一切無く、純粋に青木がお蔦の美貌に心が惹かれることがモチーフとなっている。青木はお蔦に一目惚れし、水あたりから招いた腹痛が怪我の功名で逆にお蔦を青木のそばに引き寄せる契機となった。連日の看病でお蔦のほうも青木に情が移るようになり、青木が旅立とうとする際にお蔦が未練の情を見せ、ついに青木と関係を結ぶようになった。青木の春宵はお蔦の母の「けたたましき喚声」とその後確認されたお蔦の家出と投水自殺によって醒まされる。『花姑子』の場合、行動派の安幼輿は花姑子に一目惚れしたあとすぐに朋輩に頼み花姑子に求婚を企画するが、花姑子

の居場所が見つからずに恋の病に陥ってしまう。花姑子は安幼輿に逢いに来て、「安喜極、抱与綱縲、恩愛甚至」というところで二人は関係を結び、しかしそれが終わると、花姑子は「妾冒險蒙垢、所以故、來報重恩耳。實不能永諧琴瑟、幸早別図」と安幼輿に告白する。

そこで、「恋愛感情の障碍となるもの」という条目から見れば、『聊齋志異』の話全体が人間と妖怪のタブーだと言えよう。『花姑子』の場合も例外ではない。『巴波川』の場合は、『聊齋志異』の『花姑子』と類似するものもある。それは、ハンセン病（癩病）を患ったお蔭が生来持っている「一度男に肌ふれ候へば一時に病発りて、見さへいまはしき容に」なる宿命のタブーである。したがって、お蔭は命を懸けた禁忌の打破によって美貌を喪失したことになる。

このように尾崎紅葉の『巴波川』と『聊齋志異』の『花姑子』の類似点と相違点を比較すると、尾崎紅葉の『巴波川』創作は直接的に『聊齋志異』の『花姑子』の影響を受けているとまでは言い切れなくても、少なくとも『聊齋志異』の『花姑子』から素材を取っていることは認めてよいであろう。

(2) 癩病患者という設定の意味

前述の如く、『巴波川』が批判される理由の一つとして、平岡敏夫の言う「若き婦人を無惨の末路に落す」物語があまりに残酷すぎるという要素が一つだと言えるが、確かに『おぼろ舟』の女性主人公は恋の病で亡くなり、『隣の女』のヒロインは吹矢で盲人となり、『金色夜叉』のお宮は発狂するというように、尾崎紅葉の小説に出てくる女性は無惨な末路を迎える場合が多い。この『巴波川』の場合は、特にお蔭を「一度男に肌ふれ候へば一時に病発りて、見さへいまはしき容に」になってしまう癩病（ハンセン病）患者として設定している。

尾崎紅葉の小説に癩病が取り扱われるのは『巴波川』だけではない。1893年「読売新聞」で連載された『心の闇』にも、次のような一節がある。盲人按摩の佐の市は、お客さんに宿の主人のお嬢さんお久米の美貌を強調すると、「此家の娘は顔色が頗るで、調子が好くて、氣質が優くて、情深くて、お嬢様教育の秘蔵娘として措かうが、高い声では謂はれぬが、聞けばこの土地は癩が大層行るとやら。勝れて美しい女には得であるもの、と古来の伝説。もしやその類ではあるまいか。そのやうに美しいだけ気味が悪い」と客に突っ込まれ、お久米に密かに好意を寄せる佐の市はあまりの立腹に、「療治を端折るが上に、上下六銭の規定を十銭と謂」う乱暴な客扱いをし、「客は驚きて、此地は癩病と干瓢の外に、気の強い按摩も名物かと眩きぬ。」⁽¹⁶⁾ という一場面がある。

『心の闇』では宿の主人のお嬢さんであるお久米が癩病ではないかというのはただ来店した客の憶測に過ぎず、『巴波川』の場合は、事実上の患者でしかもお蔭は青木と一夜を過ごした後、「今にも顔はくづれ眉毛はぬけて、二目とは見られぬ姿」になってしまったのであるから、生々しい変貌描写という点で『巴波川』ははるかに『心の闇』を超えている。「世間に疎まれ候事が今より思ひやられてつらく候まま、いつそ身を投げ候覚悟」というお蔭の書置きからは、癩病患者に対する世間の偏見と差別も窺われよう。

一方、お蔭を「一度男に肌ふれ候へば一時に病発りて、見さへいまはしき容に」になってしまうハンセン病患者として設定したことについて、この設定の背後には確かに明治時代の日本にはハンセン病患者が存在し、ハンセン病患者を救済する療養所が建てられていたという事実と関係があると思われるが、この迷信じみた設定の背後に、日本の民話や伝説に基づいた日本民衆のハンセン病患者への認識と関連はあるのであろうか。それで、筆者はハンセン病患者の女性が男性と性行為を行った後に発病するという話が日本にあるのかと調べたところ、確かに悲願のために、全身に血膿をもつ癩病患者から膿を吸い出してやった光明皇后の話や、毒酒を飲まされて死んだ小栗判官が、病み崩れた癩の身となってこの世に戻され、熊野湯の峰に浴したところ元の偉丈夫に戻ったという説経節「をぐり」の話や、継母に呪いをかけられて癩病になったしんとく丸が熊野の湯に向かい、清水寺で観音の力によって元の姿に平癒した説経節「しんとく丸」の話や、癩病になった聖武天皇の第三皇女の松虫姫が、千葉県印旛郡印旛村に捨てられたものの師如来の力で平癒した話などのハンセン病関係の民話伝説があったにもかかわらず、ハンセン病患者の女性が男性と性行為を行った後に発病するという民話や伝説は見つかっていない⁽¹⁷⁾。むしろ、中国の広東省、福建省および台湾において、ハンセン病に罹患した女性が男性と性行為を行い、感染させると自分のハンセン病が治ると信じられていたという迷信を偶然発見することができた。このことは果して何を意味するのであろうか。

(3) 『巴波川』と広東民話との関連性

ハンセン病の中国語での言い方には「癩病」、「麻風病」があり、中国古典文学の中に出てくる「癩病」、「麻風病」の話を調査したところ、『秋燈叢話』巻十一の『粵東癩女』の話や、『夜雨秋燈録』巻三の『麻風女邱麗玉』の話、それに呉熾昌の『客窓閑話』にこの病気に関する民話があったことを確認した。中では、『秋燈叢話』巻十一の『粵東癩女』の話は短篇のものであり、しかも、ハンセン病に罹患した女性が男性と性行為を行い伝染させるという陋習の記録があるもので、以下に全文引用する。

粵东某府，女多癩病，必与男子交，移毒于男，女乃无患，俗谓之过癩。然女每羞为人所识，或亦有畏其毒而避者，多夜要诸野，不从则啖以金。有某姓女染此症，母令夜分怀金候道左。天将曙，见一人来，询所往，曰：“双亲早没，孤苦无依，往贷亲友，为糊口计。”女念身染恶疾，已罹天罚，复嫁祸于人，则造孽滋甚。告以故，出金赠之。其人不肯受，女曰：“我行将就木，无需此，君持去，尚可少佐衣食，母过拒，拂我意。”其人感女诚，受之而去。女归，不以实告。未几，疾大发，肢体溃烂，臭气侵入。母怒其诬，且惧其染也，逐之出，乃行乞他郡。至某镇，有鬻胡麻油者，女过其门，觉馨香扑鼻，沁入肌髓，乞焉。众憎其秽，不顾而唾，一少年独怜而与之。女饮讫，五内顿觉清凉，痛楚少止。后女每来乞，辄挹与不少吝。先是，有乌梢蛇浸毙油器中，难于售，遂尽以饮女。女饮久，疮结为痂，数日痂落，肌肤完好如旧。盖油能败蛇毒，性去风，女适相值，有天幸焉。方其踵门而乞也，睹少年，即昔日赠金人，屢

欲陈诉，自惭形秽，辄中止。少年亦以女音容全非，莫能辨识。疾愈，托邻妪通意，少年趋视不谬，潸然曰：“昔承厚赠，得有今日，尔乃流离至此，我心何忍，若非天去尔疾，竟覩而失之，永作负心人矣！”郗歎不自胜，旁观者啧啧，咸重女之义，而多少年之不负其德也。为之执伐，成夫妇焉。⁽¹⁸⁾

粵東の癩女（日本語大意訳は筆者による）

粵東の某府に、女は多く癩病に患えば、必ず男子と交わり、毒を男に移すことで女は乃ち無患となる。俗にこれを「過癩」と謂う。しかし女は人に知られるのを羞じ、あるいはその毒を畏れて避ける者もいるので、多くは夜に野に誘い、従わぬ者は金で釣る。某姓の女が此の症に罹り、母は夜分懐に金を持ち道の傍で待つように命じた。夜が明けるところ、男が一人来て、行くところを尋ねた。男は、二親が早く没し、孤苦にして依る処もなく、糊口を凌ぐために、これから親友を訪ねて金を貸してもらおうという。女が思うに、体は悪疾に罹り既に天罰を受けている。再び禍を他人に転嫁すれば、罰当たりなこと甚だしい。女はこの故を告げ、金を出し男に与えると言った。男は頑として受けず、女は言う。私はもうすぐ死ぬ身で、金の必要はない。君が持てば、なお少しは衣食の助けとなろう。あまりに拒絶してくれるなと言う。男は女の誠意に感じ入り、受け取って去った。女は家に帰り、実情を告げなかった。暫くして、大いに発病し、肢体は潰れ、臭気は人を侵す。母は女のうそを怒り、かつ感染を懼れて、女を家から追い出した。女は乞食となり他郡へ行つた。某鎮に至ると、胡麻油を売る者がいた。女はその門を過ぎ、香りを嗅いでそれを乞う。皆がその穢れを憎み、顧みず唾をはく。ある少年だけが憐れみ、女に油を与えた。女は油を飲むと、五臓に清涼を覚え、痛みも少し止んだ。後に女はたびたび来てこれを乞い、少年は少しも惜しまず与えた。ある時、烏梢蛇が油の器に入って死に、売り物にならず、遂に尽く女に飲ませた。女が長い間これを飲むと、できものはかさぶたとなって数日で落ち、皮膚は治り以前の様子に戻った。恐らく胡麻油は蛇の毒を消し、去風の性質があり、女の病にたまたま合ったのであろう。実に幸運なことである。女は初めて門に入り物乞いした時に、実は少年を見て、昔自分が金を与えた人だと分かっていた。何度も告白しようとしたが、自分の姿が穢れていると恥じてやめた。少年もまた女の姿形が全然違うため、気付かなかった。病気が治り、女は隣の老婆に言伝を頼んだ。少年は早速女に会って老婆の話の通りだと分かると、泣きながら言った。あの日君が金を与えてくれたから、今の私がある。君がここに流れてきて、もし天が君の病気を取り去ってくれなかったら、私は君に会っていながら君を失い、永遠に恩知らずの人間になっていたらう。傍らの者もすすり泣きを押さえられず、女の義を重んじ、少年の恩徳を忘れないうところに感心して、進んで仲人となり、女と少年は夫婦となった。

この『粵東の癩女』の話における人物設定を尾崎紅葉の『巴波川』における人物設定と比較すると、尾崎紅葉の『巴波川』でお蔭が「一度男に肌ふれ候へば一時に病発りて、見さへいまはしき容

に」になってしまうハンセン病患者設定は、中国の広東地域の民話の発想に酷似していることが分かる。ただ、違うのは、広東地域の民話では、ハンセン病に罹患した女性が男性と性行為を行うことによって病を伝染させ、自分が治るということであり、尾崎紅葉の『巴波川』の設定では、ハンセン病に罹患した女性が男性と性行為を行うことによって発病するということである。前者は禍を他人に転嫁する陋習であるのに対し、後者は自ら卷いた禍を自分でその結果を受け止めるという自業自得の解説になっている。

『秋燈叢話』は序によれば、乾隆42年(1777)の筆記小説となっているが、一方、『夜雨秋燈録』初版は光緒3年(1877)上海申報館の刊行になっている。ここで大胆な推測をするが、読書家の尾崎紅葉は中国の典籍を濫読する中で、この『粵東の癩女』の素材を得て、それをそのまま使うのではなく、「若き婦人を無惨の末路に落す」物語を創作するという意図で、「反其意而用之」つまりその逆を取って、『巴波川』を創作したのではなかろうか。尾崎紅葉の日記と全集には、『夜雨秋燈録』の存在と読書記録は確認していないが、あるいは、尾崎紅葉は硯友社のほかの文人から発想を得て利用したとも考えられよう。当然、『巴波川』が1890年に新著百種として世に出されたことを考慮すれば、『秋燈叢話』の話に尾崎紅葉が触れる可能性は高いと言えよう。

さて、もしここで影響関係があるとしたら、このハンセン病患者設定の意味は何であろうか。中国の文学研究者王立は、「明清小説蛇毒無意中療病母題与佛教故事」という論文で、同型の話をまとめた上で、以下のような分析を試みている。

中国の社会心理においては、善行に対する報奨は常に存在するものである。明と清の時期に入り、こうした同型話には、前代には見られない意味が加わるようになった。一方では、物語の語り手はもっと民衆の日常生活と運命の中の喜怒哀楽に気を配るようになり、若い男子には、一目ぼれのような一途な恋愛を強調し、若い女性には、貞淑を堅持すれば必ず幸せを手にすることができることを強調していた。これ等の大同小異の同型話からは、明と清の時代の人々の社会心理と価値判断を見出すことが出来よう。

また、もう一方では、明と清の時代の同型話は往々にして、広東地域の「過癩」という陋習に視線を集中している。こうした陋習の被害者——当然たまには蛇の毒を飲んで助かった幸運児もいるが——大体中原の人か江南の人であることが特徴である。こうした異文が多く存在するテキストの中で、その母題の視角はほとんど中原を中心に据えて、広東地域の陋習を見ているだけで、それを努力して変えようとはしない。ただ蛇の毒の効き目に頼るだけで、幸運児の一員になることを願う。一定の程度でこうした故事からも、小農経済社会の個体に普遍的に存在するエゴイズムと僥倖の国民根性も窺われよう。⁽¹⁹⁾

上述の文章から分かるように、中国の明清時代に現れたハンセン病に関する大同小異の同型話は「病」と「死」という二つの人生において大きな消極的な要素を通して人間世界に存在する「情」

を表現しているのに対し、尾崎紅葉の『巴波川』では、美女お葛が青木に肌身を許す目的には、そもそも性行為によって男性に「過癪」するというような意図はなく、逆にお葛は青木の軽率な行為によって発病し投水してしまう運命を迎えている。このように、『巴波川』は中国の話と同じように「病」と「死」を扱う題材のものであるにも関わらず、最終的に表現しているのは「性」に止まっている。こうした逸聞性を持つ設定には、読者の好奇心を満足させる役割があると言える。

ただし、お葛のハンセン病患者であるというレッテルは、青木にとってこの女性の「他者」性の強化を意味するものであり、また社会文化的な隠喩としての意味合いもあると考えられよう。アメリカ学者スーザン・ソントグは著書「隠喩としての病」で、「病気が謎めいて見えるのは、もとを糺せばそこに未知の何かがあるように思えるからだが、病気自体（昔なら結核、今なら癌）がまことに古めかしい恐怖心を搔立てるということもある。」⁽²⁰⁾と述べている。永久に男性社会から拒絶されるお葛はこの意味でも、他人に恐怖感を与える疎外された存在であり、そういう男性社会に受け入れられることのない女性として尾崎紅葉は描いているのではなかろうか。

結びに

本論文は、尾崎紅葉と中国古典文学との関係性についての研究の試みである。一口に古典文学と言う場合に、『万葉集』や、『源氏物語』、『平家物語』、そして尾崎紅葉の場合はもっと頻繁に言われる井原西鶴との関連性があまりに強調され、中国古典との関連が見過ごされがちである尾崎紅葉研究史の現状に即し、『遊仙窟』、『紅樓夢』、『閱微草堂筆記』など具体的な中国古典を尾崎紅葉の日記や小説から探しだし、さらに『巴波川』という尾崎紅葉の早期創作と『聊齋志異』や『秋燈叢話』を考察することによって、尾崎紅葉文学における中国古典の要素という課題を提起した。一般的に漢文素読能力の高い明治時代の文学者に共通して存在している課題を、中でも最近では振り返られることが少ない明治文壇の雄である尾崎紅葉の場合に解明する糸口を見出したことは、及ばずながら本研究の意義の一つになりえよう。言うまでもなく、尾崎紅葉の文学の土壌となった古典文学には、日本のものだけではなく、中国の古典文学の存在、とりわけ現段階の研究結果に限って大胆に言うならば明清筆記小説の存在を忘れてはならないということになるであろう。

擬古典作品の場合、古典の「情」、「色」より、「恋心」を描き、近代女性の恋愛心情が、その人物の自述によって展開される。恋愛結果の如何にかかわらず、「恋心」を抱いている時の、ありがたさ、美しさの謳歌、その「恋心」の至上の境地として、『巴波川』においては「死」を覚悟した若い女性の行動を読み取ることができ、しかもこれは文字通りの命をかけた「愛」の形なのだといえよう。この意味において、北村透谷の恋愛論に負けないほどの恋愛至上主義が『巴波川』で展開されているのである。『巴波川』のほか、尾崎紅葉と中国文学との関わりは、作品の名や詩文の句など、その書いたものに、断片的に散見されるだけである。しかし、中国明清小説に見られる人物関係の複雑性、モチーフ展開の起伏迂回などの、小説の方法は、自分の創作に応用したかのように、

尾崎紅葉の集大成作と言われる『金色夜叉』にも体现されていると考えられる。この課題についての考察は、稿を改めて行いたい。

注

- (1) 土佐亨. 紅葉細見 雑考四篇. 文芸と思想, 1973 (2): 36-55.
- (2) 尾形国治. 紅葉と陸游. 国文学, 1976 (10): 180.
- (3) 尾崎徳太郎. 金色夜叉続篇. 東京: 春陽堂, 1902. 1-6.
- (4) 前田愛. 前田愛著作集第二巻 近代読者の成立. 東京: 筑摩書房, 1989. 290.
- (5) 中島国彦. 文藝時評大系「明治篇」第一巻. 東京: ゆまに書房, 2005. 263.
- (6) 中島国彦. 文藝時評大系「明治篇」第一巻. 東京: ゆまに書房, 2005. 265.
- (7) 中島国彦. 文藝時評大系「明治篇」第一巻. 東京: ゆまに書房, 2005. 266.
- (8) 平岡敏夫. 紅葉の初期小説——「おぼろ舟」その他——. 国語と国文学, 1968 (4): 31-32.
- (9) 秦重雄. 挑発ある文学史——誤読され続ける部落／ハンセン病文芸. 京都: かもがわ出版, 2011. 229.
- (10) 秦重雄. 挑発ある文学史——誤読され続ける部落／ハンセン病文芸. 京都: かもがわ出版, 2011. 230.
- (11) 尾崎紅葉. 紅葉全集第二巻. 東京: 岩波文庫, 1994. 354-355.
- (12) 尾崎紅葉. 紅葉全集第七巻. 東京: 岩波文庫, 1993. 76.
- (13) 現代文学研究会. 近代の短編小説 (明治篇). 福岡: 九州大学出版会, 1986. 32-33.
- (14) 藤田賢文. 《聊斋志异》的一个側面——关于它和日本文学的关系. 聊斋志异研究, 1993 (Z1): 183-184.
- (15) 花姑子の原文は次の版本による. [清] 蒲松齡. 聊齋志異. 北京: 中華書局, 2009. 203-205.
- (16) 尾崎紅葉. 「紅葉全集」第四巻. 東京: 岩波書店, 1994. 252-253.
- (17) 「ハンセン病史」を参照. 熊本日日新聞社. 検証 ハンセン病史. 河出書房新社, 2004.
- (18) [清] 王械. 秋燈叢話卷十一. 濟南: 黄河出版社, 1996. 185-186.
- (19) 王立. 明清小说蛇毒无意中疗病母题与佛教故事. 上海大学学报, 2008 (4): 123-124. 原文中国語, 筆者によって日本語大意訳出.
- (20) スーザン・ソントグ. 隠喩としての病. みすず書房, 1982年1月: 8.

執筆プロフィール

張秀強、広東外語外貿大学日本語学部准教授、成蹊大学客員研究員。研究分野は日本近代文学。本論文は中国広州・暨南大学のシンポジウム（2013年11月）の際、口頭発表した内容を大幅に修正し、加筆したものである。口頭発表の際、国際日本文化センターの鈴木貞美教授よりご教示を頂戴し、ここに感謝の微意を表す。なお、本研究は2014年度「広東省高等教育創新強校工程」項目（GWTP-BS-2014-07）の支援を受けている（Supported by innovative school project in Higher Education of Guangdong, China）。また、日本学術振興会平成26年度 二国間協定等による研究者交流事業（受入）として支援を受けた。